

令和6年度

## 益田市総合教育会議会議録

日 時 令和6年5月2日（木）10：00～

場 所 市立保健センター大ホール

益田市教育委員会

## 益田市総合教育会議

開催年月日 令和6年5月2日（木）10時30分～

開催場所 市立保健センター大ホール

### 日 程

1 市長あいさつ

2 議事

(1) 学びに向かう子の育成について

- ・「気づきと対話」のある授業づくりについて

(2) その他

出席者

総合教育会議

益 田 市 長  
教 育 長  
教 育 委 員  
教 育 委 員  
教 育 委 員

山 本 浩 章  
領 家 芳 明  
齋 藤 哲 瑯  
原 田 笑  
山 本 ひとみ

事務局職員

教 育 部 長  
教 育 総 務 課 長  
学 校 教 育 課 長  
学 校 教 育 課 参 事  
教 育 総 務 課 長 補 佐

長 嶺 勝 良  
齋 藤 勝 義  
田 原 正 紀  
杉 原 貴 宏  
植 田 拓 也

齋藤課長

それでは、定刻より少し早いですけれども、皆さん揃われましたので、ただいまより令和6年度益田市総合教育会議を開催いたします。

司会を務めさせていただきます教育総務課の齋藤です。よろしくお願いいたします。

本日の会議につきましては、公開となっております。事前に周知をさせていただきましたが、本日傍聴者はおられないということでございますので、ご報告させていただきます。

それでは、今年度初めての会議ということにもなりますので、いま一度皆さんに総合教育会議とはということにつきまして、長嶺部長よりご説明をさせていただきたいと思っております。

長嶺部長

おはようございます。

本日、大庭委員さんが体調不良ということでお休みですが、この総合教育会議はここ数年毎年最低1回は開催しております。教育部局と市長のほうでいろいろな意見を交わしながら、様々な施策に反映するというところで開催していますが、改めましてこの総合教育会議はどのようなものかというのを、ご紹介させていただきます。

実は、平成23年に滋賀県大津市のほうで陰惨ないじめ事件がありました。この事件に伴って、当時の教育委員会はこういったものをなかなか表へ出そうとしないというところもあって、教育委員会制度というものが大きく見直しがかかったという状況です。

その中で、教育委員会部局と、予算や人事の権限を一定程度持つ市長とでしっかりと意見交換をして、いろいろな施策に反映するよというところで、総合教育会議を各自治体に設置しないさいということが法律の中でうたわれ、設置がされ始めたというところになります。平成20年の後半からですので、まだまだ新しい制度というところで、自治体によっては開催したりしなかったりという部分、以前は益田市も開催したりしなかったりというところがあったのですが、色々な大きな問題もありますので、毎年開催していこうということで、ここ数年は毎年開催させていただいているという状

況です。ここで何かを決めてやっていこうということではなくて、しっかり意思疎通をした上で、市長部局と教育委員会部局が一緒になって取り組んでいこうと、それぞれの立場で、予算を措置するのであれば予算を措置するし、学校現場が一生懸命動いていかなければいけないということであれば、そういった取り組みをしていくというところで、意思統一の場として位置づけているという状況です。定例の教育委員会と大きく違うのが、定例教育委員会は毎月やっておりますが、教育委員の皆さんと我々事務局とでやり取りをしておりますが、総合教育会議では、教育委員の皆さんと市長とでいろいろな思いを出し合って対応していくというものになっております。今回、教育に関係する、子どもたちにも関係する新しい考え方、新しくもないんですけど、今までそれぞれが取り組んでいたものを有機的に結びつけた取り組みということで、こういう方向でいろいろな問題に取り組んでいこうという提起のほうをさせていただこうと思いますので、いろいろなご意見をいただき、肉づけをしながら、今日我々が言ったことが全て決まりでもございませんし、一緒につくり上げていきたいと思っておりますので、貴重なご意見をいただけたらと思います。

それでは、総合教育会議のほうを始めていこうと思います。

齋藤課長

それでは、議事に入ります前に、山本市長から挨拶をお願いいたします。

山本市長

皆さん、おはようございます。

本日は、大変お忙しいところ、総合教育会議にご出席いただきありがとうございます。また、教育委員の皆様には、益田市の教育行政、また行政各般にわたりましていろいろとご理解、ご協力を賜り、誠にありがとうございます。

さて、総合教育会議の目的については、先ほど長嶺部長のほうから説明がありましたように、何かを決定するということではなくて、協議調整をする機関ということになっております。

本日の議題については、私も事前説明を受けましたけども、令和6年度から益田市の学校において始めようとしている、気づきと対話のある授業づくりについてということであります。かねてから、主体的・対話的で深い学びの実践ということが日本の学校教育の大きな指針とされておりますが、この気づきと対話のある授業づくりについて、教育委員の皆様方から率直なご意見を承りたいということですので。

教育委員会事務局としては、当然考えを持って進めていきますが、教育委員の皆様はそれぞれ様々なバックボーンをお持ちだと思いますので、率直に思いであるとか、あるいは疑問点とかを今日出していただきまして、それによって実際に今後進めていく事業の在り方の肉づけができれば幸いと考えております。皆様方から、率直な忌憚のないご意見、ご質問を賜りますようお願いを申し上げます。簡単ですが冒頭のご挨拶といたします。どうぞよろしく願いいたします。

齋藤課長            それでは、議事の進行に参りますが、進行につきましては山本市長にお願いしたいと思っております。

山本市長            では、早速議事に入りたいと思っております。

(1)の学びに向かう子の育成について、気づきと対話のある授業づくりについてということですので、これにつきまして事務局から説明をお願いします。

杉原参事            失礼いたします。気づきと対話のある授業づくり推進事業についてご説明をさせていただきます。

資料は、i P a dの3ページをご覧くださいと思います。

先ほどもございましたが、学びに向かう子の育成ということを目指して、ひいては益田市が掲げております中高一貫教育の推進とありますが、子どもたちのこれからの将来の選択肢の幅を広げるということにもつながる1つの事業と考えて、今年度、令和6年度より4年間の事業計画で進めさせていただきたいと思っております。

この事業については、この図にありますように、左側の授業改善の推進というところと、端末活用の充実という2つの両輪を回しながら、真ん中の気づきと対話のある授業づくりを突き進めていくというような考えでございます。

左側の授業改善の推進のところでございますが、平成29年度に現在の学習指導要領が告示されました。先ほどご挨拶にもありましたけれども、現在の学習指導要領においては、主体的・対話的で深い学びの授業改善ということがうたわれておりまして、益田市内の各校においても、各校で主体的・対話的で深い学びの実現というところを目指して授業改善を進めておられます。その各校の研究実践に寄り添いながら、教育委員会としても授業改善の推進を回していくというのが左側の円になります。

右側の円については、これも今まで継続して進めておりましたが、端末活用の充実ということで、こちらは今年度は6校の推進校がございまして、その6校を中心に端末活用の研究を進めながら右側の円を回して、真ん中の気づきと対話のある授業づくりというものを進めていって、最終的には学びに向かう子の育成ということを目指しております。

土台のところでございますけれども、校長会等と連携した、まずは安全・安心な学校づくり、学級づくり、その基盤に乗っかってこの事業を進めていきたいと思っております。

それでは、気づきと対話のある授業とはどういうことかというのは、資料の4ページにございます。これの留意点というところが、右の下のところにも書いてあります。これは、あくまでも今お示したモデル図というところでございます。4年間、各校で取り組んでいただきながら、それから推進校を中心に端末活用を進めながら授業モデルをブラッシュアップしていきながら、行く行くは令和9年度に最終形の益田市型のモデルというのを目指して推進してまいりたいと思っております。

では、まず気づきとはどういうことかという、このモデル図の一番左隅のほうにございますが、子どもたちは考えたり、教わったり、対話したり、やってみたりする中で、なぜだろうとかやってみたいとか分からないなど、いろいろな気づきを持ちます。その気づきをより広げたり深めたりしながら学びをどんどんどんどん深化させていくというのがこのモデル図になっております。

この気づきを広げたり学びを深めたりするために、2つのスポットライトがございます。まず1つ、左側のスポットライト、どう気づきを広がり深めていくかということで、まず1つは対話による学びになります。先ほど学習指導要領の話もしましたが、まず対話によって自分自身の気づきを、例えば友達の見解や考えを自分の考えと比べながら聞く、それから話す、もしくは地域の方と会話、対話しながら自分自身の考え、その地域の方の考え、おうちの人の考えを聞くこともあるかもしれない。そういった対話をしながら、自分と他の人との考えを比べながら、より気づきというものを広げていったり深めていったりということが対話による学びというところです。

もう一つのスポットライトとしては、右下のほうに書いてありますが、端末による学びです。先ほども授業改善と端末活用という話をさせてもらいましたが、端末によっていろいろな検索したりとか、それから端末を活用することによってより対話が生まれるということもございます。写真より動画を見たほうが子どもたちの気づきというものが生まれたりもしますので、こういった対話と端末による学びを入れながら、この気づきをどんどん深めていくというようなモデル図になってございます。

先ほどもございましたが、安心して学べるやっぱり学校、学級、そういったものが土台にあって、初めて安心して対話ができる、話せるという授業が作り上げられるものと考えております。こういったモデルをブラッシュアップしながら、4年間で取り組みたいと

考えております。

それでは、簡単ですが気づきと対話のある授業づくり推進事業についての説明を終わりたいと思います。

山本市長       では、説明がありましたが、これからは委員の皆様と、今事務局が説明した内容を踏まえて協議を進めたいと思います。皆様から率直にご質問ですとかご意見ですとか承りたいと思いますが、いかがでしょうか。

領家教育長       それでは、最初に私のほうから感じたことをお話しさせてもらえればと思うのですが、対話のある、そして気づきということがキーワードになるのではないかなと思います。まさに、今この5人の場面对話の場面だと思って、自分事として今考えるんですけど、さあ何を話そうかなと思っています。ということは、その気づきってということについては、その人その人の今の心の持ちようですとか、それからこれまでの自分の背景にある多様な経験をしてきたこと、そんなことが子どもたちにはないと、第一歩の最初の声出しってというのがなかなかできないから、何か気づくこともできないんじゃないかなっていうようなことを思います。

そうすると、子どもたちの家庭での会話ですとか、あるいは地域の大人だったり、あるいは同世代、ちょっと上のお兄ちゃんやお姉ちゃんたち、そんなところの関わり、体験みたいなことが、まずその気づきを起こす第一歩になるのかなというようなことを、まさに今この5人で、僕が1人しゃべっている中で感じる事なんです。そのことについてちょっと話題にさせていただいて、皆さんはどんなふうにお感じになられたか、まず自分自身の、仲間の前の個の一人としてということ伺ってみたいと思うのですが、いかがでしょうか。

山本市長       対話っていうものがどういうところで生まれてどういうふうに全体につながっていくかっていうことの間いかけが、今、領家教育長からありましたけども、いかがでしょうか。

齋藤委員

ここで今、全体を見て一つ入れてほしいなと思うのは、「学んだことを活かす」という視点です。その学んだことが社会の中で活かされるという経験が今の子どもたちにはあまりありません。社会というのは、年齢も考え方も経験も違う人たちがいて、人々はその中で生きているのです。極端に言えば、今子どもたちは家庭と学校、塾に行けば塾しか知りません。そのため、社会との関わり方が分かりませんし、年齢の違う人たちとのコミュニケーションがとれないのです。そこで、「社会の中で活かす学び」というキーワードを入れて欲しいと思います。

一つの例として、内閣府調査から世界の若者と日本の若者を比較したデータ（日本、韓国、アメリカ、イギリス、フランス、スウェーデンの7カ国・13歳から29歳の若者）を取り上げてみると、「自分自身に満足しているか」の間では、日本の若者が一番少なく、つまり、自分自身に自信がないし、満足感も少ないという傾向が見られます。それから、「将来への希望」についてもイギリス、スウェーデンが90%なのに対して、日本が62%。「友人関係の満足度」や「充実感を感じているか」などを含めて、その他の項目においても日本の若者の数値が低い傾向にあり、問題と言わざるを得ません。

それからもう一つ、帝国データバンクが、今企業がどんな人材を求めているかという調査を行っています。それを見ると「コミュニケーション能力が高い人」を求めたいというのが一番多く42.3%。その次が「意欲的である」42.2%などを挙げています。以下いろいろありますが、これらの調査から感じることは、一生懸命学校で学んではいるけれど、それが「生きる力」「自立心や社会性の育成」などにつながっていないことが明らかになり、今の日本の教育の中の大きい問題ではないかなと思っています。

今、教育長がお話されましたけれど、親御さんたちとか地域の方々とか、いろいろな形で学校に協力している方々がいらっしゃいますから、そういう人たちを巻き込んで、一緒に「学び」っていう

のに取り組んでもらい、少し子どもたちのやる気を引っ張り出す方法が考えられるのではないかなと思います。コミュニティ・スクールの積極的な活用を図ることも考えたらいかがでしょうか。

ちょっと長くなりましたが、そんな感じを持ちました。

山本市長

ありがとうございます。

今のお話を聞いて、事務局のほうから何か受け止めたこととかありますか。

杉原参事

先ほど齋藤委員さんからもございましたが、やっぱり地域との対話とか保護者との対話っていうのも非常に重要なキーワードではないかなと思っております。

今、小・中学校では、ふるさと教育等で地域の方と関わることも多いですけれども、それで十分かというところ、委員さんが言われたところにもありますけれども、もしかしたらそんなに十分な時間が割けているとは言えないかもしれないということを踏まえて、そういったことも取り入れながらこの事業のほうを進めてまいりたいなと思っております。

山本市長

そのほか、いかがでしょうか。

原田委員

私が気になるのは、ここで目指している「学びに向かう子の育成」というところです。この「学びに向かう子」がどういう定義なのか、どういう子を「学びに向かう子」と言うのか、それは現場で共有できているのか。それがちゃんと共有できていて、皆が同じビジョンを持っていないと、なかなか上手く進めていくことができないのではと思います。私は子どもが4人いますが、私の子は「学びに向かう子」なのかどうなのか、それはどういう風に判断するのか、どういうゴールに向かおうとしているのかをもう少し具体的に共有しなければ、どのように取り組んでいけばいいのかわからないと思います。そこは一つ軸を通して、皆が同じビジョンに向かえるようにしないと難しいのではないかなというのを感じました。

もう一点、今回研修会を5回実施するということですがけれども、

意欲のある先生方に参加して頂くということであれば、すごく有難いですが。ただ現状、先生方は多忙で、教員の残業時間を何とか減らしていこうとしている中で、その研修時間を確保するに当たって、意欲がある人だけではなくて、例えば各校から1人出さないといけなくなったりした場合に選ばれた人は、本当にこれに意欲的に向かえるのだろうか、さらに負担が増えるのではないかと懸念があります。その点も踏まえて、別の根本的な課題を解決する必要があるのではないかと思いますし、いろいろな方向から課題を解決しながら進めていかなければ難しいのではないかと思います。

山本市長

ありがとうございます。

とても大切な問題提起ではないかと思います。今まさに我々も対話しているわけですし、今回の事業の在り方についても対話しているのが非常に重要なものになっているんですけども、対話というものの前提には、例えば私なら私の頭の中にあることがあって、これを人に伝えるためには言葉にしないといけないわけです。つまり、頭の中にあることが正確に言葉に出されているのかどうかっていうのは、もしかすると自分でも分かってないかもしれない。それが発せられて、それを聞いたり、もしくは文章であれば読んだりした人が、今度はそれを自分で解釈をして自分の頭の中に入れるわけですけども、これはこれでまた正確に伝わっているのか分からない。ですので、学びに向かう子の育成、この最終目的の学びに向かう子っていうイメージがみんなまちまちだと、意思が通じたようで実は全然通じていないこともあり得るので、この学びに向かう子っていうのが一体何を指しているのかということは、なるべく具体的であるほうが望ましい、一義的に定まることが望ましいだろうと思います。

もちろん、その学びに向かう子っていうのは幾つかあって、それは多様性ということもあるかもしれませんが、ここがぼんやりしているようではいけないと思うんです。これについては、事務局

のほうからこうですっていうのもあると思うんですが、せつかくですので委員の皆さんからこの学びに向かう子っていうのはどういうものだと考える、もしくは考えたいというか、そういうのがもしありましたらお聞かせいただきたいと思いますと思うんですが、どうでしょうか。

齋藤委員　私もこのテーマでいろいろ考えてみたのですが、子どもたちが「分かる」ことが原点にないといけないと思います。分かった上で次へ進んでいこうという気持ちを起こさせるためにはどうしたらいいか、つまりやる気を引き出すということと、もう一つ大事なのが自分が他人から認められるということです。そこに先ほどの「活かす」がもう一つプラスされる必要があります。

これからの非常に複雑で混沌としてどうなるか分からないような時代の中を生きていかななくてはならない子どもたちには、自分では正解と思っていても社会で受け入れてもらえないことは多々あるわけで、そうするとやっぱり自分で考え他人との協力のうえに問題解決に取り組んでいく姿勢が求められます。いかに子どものやる気を引き出していくか、そのためには子どもをいかに認め、子どもの意見をじっくり聞くという大人の姿勢がとても大事になってくると思います。

山本市長　この学びに向かう子というのには、まず学びに向かう意欲が必要であると。その意欲を喚起するためには、本人の分かるという実感と、もう一つは周りから認められるということが必要だということですね。

齋藤委員　そうですね。

山本市長　大変興味深い示唆のあるご発言だったかと思います。

そのほか、いかがでしょうか。

原田委員　私は、目的意識をしっかり持つことが「学びに向かう子」の育成には必要ではないかと思います。今、何のために自分がこれをしているのか、何に向かって動いているのか、そのために何が必要なのかというのを考えられるからこそ、必要な情報を集めることができ、他者の

意見を受け入れることができ、そこから新しい意見を生み出すことにも繋がると思います。

何のために勉強しているのだろう、何のためにこの話を聞いているのだろう、何のためにこの時間を過ごしているのだろうということではなくて、今の時間がちゃんと自分の目的につながっているという自覚を持っているということが「学びに向かう子」の要素の一つであってほしいなと思います。

山本市長                    そうですね、本当に素晴らしいご意見をいただいたと思います。

山本委員さん、いかがでしょうか。

山本委員                    なかなか学びに向かう子どもの定義っていうのを言葉にするのは難しいなと思います。やっぱり、自ら知りたいとか、まずはそこからじゃないかなと思います。将来的には、自分の目標を持って目標に向かって動ける子になったり、やる気があっていろいろなところに自ら動くというところもあると思うんですけども、その前段では、自らなぜだろう、どうなんだろう、知りたい、自分で解決してみたい、そして一歩踏み出す、学びに向かうとはそういったところかなと思います。

そのためには、やっぱり教育長さんが言われたバックボーン、いろいろな体験だったりとか経験だったりとか、そういったものがないとなかなか難しいだろうなと思います。そこがあって、そして学びに向かうためのきっかけも要るような気がしています。今も教育は行われているわけで、ですけど子どもたちには、学びに向けてもう一歩踏み出してほしいということでこういった事業があると思うんですけど、今やっていることの中でもパワーアップ教室だったりとか、対話プラスだったりとか、いろいろな取り組みをやっておられて、それは少しずつ学びに向かうきっかけになってきているなと思います。

ただ、そういった今の取り組みに参加する子と参加しない子、参加できない子やどうしようかなと迷っている子など、いろいろおら

れると思うんです。参加しようと思っても、自分がとか思っている子どもたくさんいると思うので、どうしたら気軽に参加しやすいかなど子どもたちの意見を聞いたりする、子どもたちが一步を踏み出せる場がつけられると、また学びに向かう子どもたちが少し増えていくのかなと思いました。

山本市長

ありがとうございます。

領家教育長

よろしいですか。

とある校長と話をしたときに、先ほど原田委員がおっしゃったことと同じことを言う校長が数名いました。それは何かって言うと、学びに向かう子の評価指標、それをみんなで議論することが大事なのではないだろうか。まさに原田委員が言われたように、そこがぼやっとしていてはいけない。自分たちが目指す姿だったり、授業の中で子どもを見るときにどんなことを大切にするかということ共有していくことが必要だろうと。だから、立場立場で、校長は校長同士でかもしれないし、校内の職員は校内の職員同士でやっていく、そうしてどんどんどんどん突き詰めた姿になるのかな。

教育委員会でも、実は評価指標を幾つか持っているんですけど、その評価指標が果たして本当にその目指す姿にマッチしているのか。今、皆さん方がおっしゃってくださったようなことにつながるのかどうかって、とっても大事だなということを感じました。

それから、これは私の考え方なんですけれど、一番のベースとして自分が好きかどうかということをお大事にしておかないといけないのかなとすごく思います。みんな祝福されて生まれ、親と子、兄弟同士関わりながら成長していく中で、知らず知らずに自分って生かされてるんだとか、それから自分ってここにいていいんだとか、そういうことを感じながら生きていく。そういうことがベースとなって家庭の中で大切に育てられて、保育の場について少し身近なお兄ちゃんやお姉ちゃんたちと関わったり、保育士さんたちと関わったりすることで、自ら大好きだよということが育まれていくと

思います。結構子どもたちっていけないこともするんだけど、それもオーケーかなっていうふうに認めてもらえるのもそんなことかなと思うんです。

そうしたバックボーンを背負った子どもたちが、初めて学校っていう社会に入ってきたときに、こんなことしていいんだ、自分の興味あることを一歩進めていいんだと気づき、学びに向かう子になるのかななんて感じています。

だから、そういう成功体験を少しずつ積み重ねることは大事だと思います。先ほど齋藤委員がおっしゃっていたことにピットきたのは、かつて吉田小学校で勤務していた頃、ものすごく暑い夏がありました。算数の学習のときに4年生の子どもたちが、自分たちがいた3年生の教室はもうめちゃくちゃ暑いから、何とかしてあげないといけないと、校長先生に直訴したんです。エアコンなんていうのはその頃は言えるような状況じゃなかったから、せめて扇風機を買ってくださいというのを、勉強したグラフを持って、僕のところにプレゼンしに来たんです。何クラスも続々ときて、誰かからの差し金に違いないと思うくらい、声があがりました。

たまたまそのときに、教育委員会の人たちも学校訪問に来てくださっていて、せっかくだから一緒に聞いてもらって、結局熱意に負けて、事務職員の方たちと相談して縦型の扇風機を買ったんです。その年に、ちょうどめちゃくちゃ暑くなって、市長さんたちもいろいろとご苦労してくださって、いろいろな方たちにプレゼンをしながら、ホームページでお金を寄附してもらいながら、という益田市として第一歩となるエアコン事業が始まったんです。

そのプレゼンした4年生たちは僕たちが校長先生にプレゼンしたからこのエアコン事業が始まって、益田市の学校にエアコンがついたんだみたいな超勘違いをして、その子どもたちがもう高校生になっているんですけれども、そのやったことはまさに生きる学びだと思います。こういう成功体験をしている子どもたちはいっぱいいま

すし、結構いろいろな小学校・中学校の現場で、総合的な学習時間をベースにしながら、そういう学びが少しずつ実現したり、とある中学校では公民館に行って公民館の人の仕事を聞きながら、じゃあ自分たちでできることは何なんだみたいなことの体験をしたり、まさにこれらも目的意識も含めた学びに向かうことかなと思うんです。

ですから、今お話しいただいたことは、皆さんの生活、バックボーンからの発言ですし、そんなことを子どもたちと共有しながら、この学びに向かう姿っていうのを突き詰めていければ、事務局からもまたアドバイス、提言をもらって学校に返せるんじゃないかなと思って、とてもありがたいなと思って聞かせてもらいました。

山本市長

いや、本当に面白い実例をお聞かせいただいて、学校現場での子どもたちの自主性がうまく育まれる、いろいろと幸運もあったかもしれませんが、いい実例だったなと思いました。それは本当に、教室での授業とは違う子どもたちの自主的な活動が花開いたっていうことだったと思います。

私も1点申し上げたいのは、学びに向かう子っていう定義の中では、時間軸もあるんじゃないかと思ったんです。というのは、基本的にこれは学校教育の中で行うことなので、児童・生徒の間のこと対象になっているんですけども、今の時代はどんどん世の中のありようも変わってきて、それこそリスクリングっていう言葉があるように、生涯学び続けないといけない時代ですよ。だから、学校時代に学んだことがそのまま生涯ずっと通用するかというと、そうじゃなくなるかもしれない。したがって、子ども時代に学びに向かうだけではなくて、学校を卒業してから、大人になってから、もっと言えばシニアになってからも学びに向かうという習慣を身につけてもらうということが学校教育の大きな目的に特に今なっているんじゃないかと思ったんです。

ですので、その学びに向かうっていうのが、今学んでいるという

静的な状態だけではなくて、動的な、ずっと矢印が学びに向かって  
いるような子ども、学びに向かっているような人間を育てていくと  
いうことが重要なんじゃないかなと思いました。そのために、今の  
学校時代の授業の在り方をどうしていくかということが今求められ  
てるのかなと思ったところです。

山本委員 先ほど、齋藤委員さんが言われた学びを活かすとか、あと生活に活  
かした学びが必要って、市長さんも言われた一生学びが必要だとい  
うことにつながると思うんですが、やっぱり学ぶことは必要だとい  
う、自分たちにとって当たり前なこと、生きるためにはやっぱり必要だ  
ということが「分かる」ということが大事かなととても思っていま  
す。子どもたちの、何かそういう学びに対する気持ち、ありよう、そ  
ういったところも少し評価指標になるんじゃないかなということはず  
ごく思いました。

齋藤委員 それと、とにかく学校、教職員が忙し過ぎます。同様に、子どもた  
ちにも家庭にもゆとりがない現状がありますよね。やはり、これらを  
考えるもう一つ裏のバックボーンをしっかり把握する必要があり、子  
どもの実態とか家庭の状況をしっかり把握する必要があり、学校はそ  
の状況を知らなければいけないと思います。学校教育は人生の十数年  
しかないですし、一番大事な成長発達の大事な時期に、子どもたちの  
やる気をそいだり、人格を無視するようなことがあってはいけませ  
ん。子どもたちに聞いてみると、実は中学生が勉強しなくなった一つ  
の原因は、特に島根県なんかはそうなんですけど、高等学校の入学定  
数を満たさなくなったことが考えられます。勉強しなくたって何とか  
なるということがあるのではないのでしょうか。地方の教育的な課題に  
はなってきていると思うんですけど、やはりまず先生方の精神的、身  
体的なゆとりと安らぎをどうつくるかと同時に、子どもたちも同じよ  
うに必要かつ大事だろうと思います。

それで、私が今まで行った調査を分析してみると、家庭が安定し  
ている子どもたちは精神的にも安定しているし、学校生活もうまく

いっているし、友達関係もうまくいっているということです。さらに、益田市の令和4年度の学力調査を分析してみると学校が楽しいと答える子どもは、先生方に認めてもらえるという数値が高いことです。これは当然なわけで、そうすると、友達関係もいいという結果が当然出てきます。

もう一つ、教科について分からないとき先生に相談ができる子どもは、学校に行くのが楽しいと答えています。その子どもたちは、算数の成績もいい、理科の成績もプラスの結果が出てきます。せっかくの調査ですからもう少し詳細な分析をしてみることに併せて、益田用の必要なデータを取る方法を考える必要があるように感じます。成績のレベルアップだけではない「学び」っていうのをぜひこの中に含めてほしいなっていうのを私は強く言いたいです。

山本市長

原田委員さんの投げかけから、いろいろなご意見をいただけたかと思えます。このあたりでどうですか、事務局のほうの所感というか、気づきを。

杉原参事

まさにこの場面が気づきと対話だなと思っておりまして、先ほど教育長さんのほうからもありましたけれども、事務局としても一応この学びに向かう子の育成というところの指標みたいなものは考えていたんですけれども、やはり我々だけで考えている指標だけでは足りない部分もたくさんあるんじゃないかなというのは、今日のこの時間だけでもいろいろ気づくことができました。

やっぱり、目標みたいなのが明確に定まって、それに向かって皆さんのベクトルが同じ方向に向かうというところが必要ではないかなというところで、事務局の一応指標もございますが、一旦学校現場の教職員だとか校長等ともディスカッションしながら、益田市としてどういった指標でこの学びに向かう子というのを目標とするかについて考えてみたいなということを思っております。1回目の研修を6月に開催する予定にしておりますので、そのあたりでまた皆さんのご意見を集約して考えていきたいなと思っております。あり

がとうございました。

田原課長

補足ですけれども、私は教員出身じゃない、市の職員としてこの間やってきましたけれども、そういう意味で、原田委員が言われたように、今の学校現場の教員の状況はどうなのかっていう視点です。いろいろ求められても普段でも忙しいのにというところ。この辺にやっぱり課題はあるんだろうというふうに認識をしております。

そういう中で、現状の中でできることできないことあるんですけども、できる範囲のことにつきましては、事務局としてしっかり取り組むことで、この事業を学校現場と一緒に進めることができる環境をつくっていききたいと考えております。

山本委員

学校の先生方の状況についてなんですけれど、この事業でも成果や課題の共有化っていうのがとても大事だと言われています。例えば、端末による推進校6校がありますけれど、先日、シンポジウムにお邪魔させていただいたときに、各校とも最初は大変な様でしたが、今は本当に生き生きと端末を使った授業をやっておられて、まさに気づきの広がり、学びを深める取り組みを実践しておられます。

全ての学校がこういう推進校並みのことができるとは思いませんけれども、経験していない分だけ、その情報だったり成果だったりやり方だったりっていうのは、本当にうまく共有していけば推進校でなくてもいい形の成果が現れるんじゃないかなと思っています。という意味で、すごく共有化っていうのは大事だと思うんですけど、こういったところを具体的にどのような形で考えておられるのかなというのは少し聞いてみたいところがあります。

杉原参事

今年度も、名前はまだ決まっておりませんが、年度末に成果発表会を行いまして、この事業図の真ん中の研修会第4回のところに共有化というのを書かせていただきましたが、そういったところで推進校の取り組みの実践は発表していただこうかなと思っています。

それを受けて、先ほど言われましたけど、各校で同じことをやることは、やっぱり学校の実態とか規模とか方向性とかいろいろあり

ますので、なかなかそのとおりにはいかないですけども、その考えをしっかりと各校に持ち帰ってもらって、その各校でできる取り組みを実践していただきたいなと思っているのと、あと左側にある学校訪問というのを定期的に学校教育課の指導主事のほうで行います。そういったところで得た情報みたいなのは、必ず管理職とか研究主任とかと共有するということにはしておりますので、他校をいろいろ回らせていただいたときに、いい実践みたいなものは各校へ広めてまいりたいなと思っております。

山本委員

なかなか体験していない先生方に対して、共有してやってみようという、もうすごく難しいと思いますので、そこは少し丁寧にされるといいのかなと思っています。それから、各校には推進校でなくてもICT担当の先生方がいらっしゃると思います。先生方は研修の機会も多いと思いますので、進めていきたいと思っているかもしれませんが、全職員さんが同じ方向を向いているかというとなかなか難しく、少し意識に格差があるんじゃないかなというのは少し予測するところだと思います。そうするとなかなか進めにくいということもあるので、そういったところをICT担当の先生方の意欲がそがれないように、少しフォローしていくことも必要かなと思いました。

杉原参事

しっかり伴走してまいりたいと思います。

齋藤委員

今この1ページ目の下の図に、「考える」「教わる」「やってみる」「対話する」という4つのキーワードがありますが、これは教師から教わるという主語が教師になっていると思います。できれば「教え合う」とか「語り合う」といった、子ども同士の対話的な授業の方法論を考えてみる必要があるのではないかなと思います。

それから、その横に「安心して学べる授業づくり」とありますが、安心して学べる授業という意味が今ひとつ分かりません。それともう一つ、できたら「挑戦」という言葉をどこかに入れてもらいたいと思います。“人生は厳しいんだよ”っていうことも伝える必要があると思います。これからの人生100年を1人でどう生きて

いくか、とても重要なテーマですので、触れてもらいたいものです。そして今の国際社会はとても複雑になってきています。いろいろな事件や事故、災害が起きたり、戦争が起こったりしています。このような状況についても正しく伝えることが大事だと思います。

山本市長  
杉原参事  
齋藤委員

これについて事務局はいかがでしょうか。

なかなか難しい…。

難しいですが、その努力は必要に思います。実は親御さんも、今は子どもを叱らなくなりました。「怒る」と「叱る」とは違いますが、諭しながら叱るのではなく精神的にかつとなって怒ることがほとんどです。それは学校においても同じです。子どもたちに学校の様子を聞いてみると、多くの子どもは「なぜ先生はあんなに怒るのだろうか」と言っています。前々から言っていますが、まず校則ありきではなく、人間としてどう生きていくか、それに必要なことは何かなど、先生方はもとより親御さんたちとの共通理解を図りながら前に進めて欲しいですね。

杉原参事

授業のモデルがこの対話とか端末を活用して学びを広げたり深まったりっていう、1周だけじゃなくてずっとスパイラルして、先にどんどんどんどん広がっていくようなイメージかなと思っていますので、そういう意味ではその先にやっぱり挑戦というところはキーワードとしてはあってもいいかなと。

齋藤委員

今、食糧不足で世界の子どもたちの数百万人が死んでいますし、戦争状態もあって食糧不足や物価高騰など大変な事態になっていますし、日本の食料自給率は39%を切っています。それから世界各地での地震、火山爆発などが発生するなど、非常に厳しい現実があります。このような厳しい現実にももっと触れて欲しいですね。

山本市長

私、今伺っていて思ったのは、そういう世界の厳しさとか世間の厳しさとか、そういったものにまさに気づかせるのがこの気づきの本質であったり、そういったことを対話して子どもたちがより理解を深めていく。簡単に言うと、先生が今現状はこうなんだ、だからみんなし

っかりやらないと厳しいんだぞって言うておしまいになるんじゃないかって、理想を言えば子どもたちが端末を通してとか、あるいは自分の学習の中で世界はこうなんだと気づいたことを発言して、それをきっかけにして子どもたちの間でさらに対話が広がって、理解とか、もっと言えば今言われた世の中の厳しさに対する自覚だとか、これではいけないんだっていう、現状から離れて、現状とは違う状態になるように挑戦していく、そういう意欲が生まれることが望ましいんじゃないかと思いました。

私も対話による学びとか気づきの広がりっていうのは、言葉としてはよく分かるんですけども、具体的にこれが今までとどう違うのかっていうのはいまいち分かっていないんです。ですので、じゃあその気づきのあるっていうのは、反対に言うと気づきがないっていうのはどういう状態なのか、その気づきがあるようにするためにどう変えていくのか。あと、対話というのも、対話ではない状態というのはどういうもので、それをどうすることによって対話のある学びにしていくのか、それのもうちょっと具体的なところを聞かせていただけたらと思うんですけども、事務局の考えを。

杉原参事

気づきがないっていうのはなかなか難しいことかなとは思いますが、委員さんのほうからご意見もございましたが、基本的には受動的に何でも言われているだけというか、先ほどあった教わるだけみたいなところではなかなか気づきっていうものは浮かばないかなと。あくまでも受動的に聞いていけばいいというような、そういう状態はやっぱり気づきがないというところかなと思っております。

やっぱり気づきが学びの出発点と考えています。何でそんなふうになるんだろうか、どうしてなんだろうとか、これってちょっと言っている意味がよく分からないなと思うことが気づきだと我々は解釈をしております。これは安心して学べる授業づくりになるんですけども、そこを素直に、安心してちょっと分からないんだけど教えてくださいとか、これってどういうことなのって隣の子や先生に

聞けることが安心して学べるというところもあり、そこが気づきかなと思っているところがございます。

対話というのも、いろいろな対話があっというと思っていて、友達とだけの対話じゃなくて、教科書との対話もあれば教師との対話もあるし、隣同士の友達、もしくは4人のグループの話、もしくは学級会のように全体での対話ということもあるでしょうし、最初の事業説明でも話しましたけれども、地域に出て地域の課題なんかを調べたりするときに、地域の方との対話であったり、それから家庭に帰ってから保護者との対話であったり、様々なところで対話が生まれていく、そこから自分から気づきを得る。そういう関係性みたいなところが一つの対話の形かなと私たちは捉えております。

山本市長

分かりました。

特に気づきについては、例えばさっき教える、教わるっていう言葉がありましたけども、これは例えば授業で言えば教師が出発点になって教えることができるわけです。でも、気づきっていうのは、これは主体は子どもたちなので、子どもにさあ気づきなさいって言っても気づきようがないわけで、気づかせるきっかけをどう与えるのか、学校なり先生なり、もしくはそういう環境をどう教育委員会なり市がつくっていくのかというところがまさに問われると思うんです。

その気づきのきっかけっていうのは、1つじゃなくて幾つかあるかと思うんですけども、それはどういうふうな想定をされてるんでしょうか。

杉原参事

いろいろな方法はあるかなと思ってはいるんですけど、授業で考えると、やっぱり課題の提示だったり発問の工夫かなと思っています。分かり切ったことを問うんじゃないくて、一歩先をいくような問いをすとか、課題提示にしても、先ほども言ったように絵だけじゃなくて動画で見せるとか、子どもたちがおおって思うような内容の提示とかいろいろな方法があるかなと思っていて、今こういうものをというも

のは具体として示してはおりませんが、そういったところも含めて各学校に投げかけて、気づきと対話が生まれる発問とか課題提示みたいなものも考えていただきたいと考えています。

山本市長  
齋藤委員

分かりました。

質問していいですか。

「考える」「教わる」「やってみる」「対話する」とありますが、「対話」という言葉は制服を着てきちんとして何かやらないといけないみたいなイメージが感じられます。ここは「話し合う」とか「語り合う」とか、ソフトな言葉は使えませんか。そして教わってというのと同様に、教え合うとか考え合うとか、そういったキーワードが入ってもいいかなという気がします。それから先ほどの「安心して学べる授業づくり」ですが、例えば、「楽しく学べる授業」とかに変えられないのかなと思います。

先ほど「挑戦」という言葉をあえて使ったのは、自分で積極的に考えさせて、積極的にいろいろ挑戦させて、やってみる、失敗もする、反省もする、そこでもう一回やってみるっていう、この繰り返しが必要なためです。

それからもう一つ、「端末による学び」という言葉が入っていますが、ここであえて端末という言葉が必要なのかなのかなと思います。全体のバランスを見ると。どうしても学校の授業を通して先生方が教えるっていう方向性が強く出ています。「学び」の範囲が狭いんじゃないかなって気がします。

山本市長

分かりました。

いろいろと重要なことをおっしゃっていただけたと思うんですけど、特に今伺っていて気になったのが、安心して学べる授業づくりの安心してっていうのは、どういう思いを込めてここに盛り込まれたかということと、端末による学びっていうのは、これは当然目的ではないわけで、端末というのは手段ですね、それをあえてここに明記されたのはどういう思いからかっていうのは、ちょっとそれを

事務局のほうから説明をお願いします。

杉原参事

なかなか言葉というのは難しいところではありますが、やはり学校が好きだとか友達から認められているだとか先生から認められているだとか、そういったところが高まって初めて僕はここにいていいんだという思いが育っていく、そういうイメージで安心してという言葉を書かせていただいております。先ほどもお話ししましたが、例えば友達同士でも、答えが一つのとくに間違えてはいけないという空気の学級でなくて、間違ってもいい、何回失敗しても大丈夫だよという空気の学級づくりという意味合いでこの安心して学べる授業づくりのイメージを持っております。

それから2点目、端末に関してですけれども、あくまでもこれはやっぱり目的ではなくて手段ですので、端末を使えばいいというような授業ではなくて、先ほど山本委員さんからもございましたが、いろいろな活用方法でどんどんどんどん便利になっていくものもあるし、その児童の学びにとって必要な場面と必要ではない場面もあると思います。端末を使ったほうが自分は分かりやすいという子もいれば、いや僕は別にノートに書いたほうが分かりやすいんだっという子もいるだろうしっていう、いろいろな方法はあると思いますので、その一つのツールとしての端末というイメージで書かせていただいております。1人1台端末ということで市として予算立てているというところもございますので、ちょっと難しいと思いますけれども。

山本市長

分かりました。

では端末について言うと、恐らくまだ学校現場で先生方が十分に端末の利点を活用できていないという思いがあるんじゃないかと思うんです。つまり、今ここにある問題意識というのは、端末を十分に活用して、端末の可能性を引き出す、教える側のことが求められているんじゃないかという気がするんですけど、そのあたりはどうかなんですか。



出す学びの授業」とかはどうでしょう、皆さん方のご意見を伺いたいんですが。

山本市長  
杉原参事

この資料の中の言葉は、まだ変更可能なものなんですか。

そうですね、先ほど説明のときにも述べさせていただきましたが、これはあくまでもモデルということなので、これから先4年間これを進めていく中で、ブラッシュアップしていこうと思っております。今回、こうやって総合教育会議の皆さんのご意見も参考にしながら、どんどんよりいいものにしていければいいと思います。

山本市長

分かりました。

当然、事務局の思いがあって、説明をして引き出して書かせてもらっているわけですが、どうしても言葉になるとそれが固定化されて、それが与える一般的なイメージというものがあって、それと本来の意図が違ふといけませんので、どういう言葉を使うかというのもやっぱり大事だと思うんです。

ですので、先ほどから齋藤委員さんが問題提起されている、安心して学べるの安心してについては、皆さん率直なご意見を伺いたいと思うんですが、いかがでしょうか。

私もさきほどの杉原参事の話をお伺いして、安心してというのが、例えば落ち着いてとか、そういう意味合いのほうがいいのかなと思ったんです。安心してという言葉は、気楽にとか安易にとかというのを想定してしまいやすい言葉なのかなと思いました。決して今の日本の子どもたちは安穩として学んでいる余裕はないとも言えるわけで、もちろんいろいろな家庭環境があって、まずはこの安心が必要だという方もいるわけですが、またそればかりでもないわけで。

齋藤委員

よろしいでしょうか。

例えば、「自分で進んで学ぶ」とか、積極的に前向きに子どもたちのやる気を引き出すようなキーワードがあるといいのではないかなと思います。そうすると、左側にあるような形で、やってみるっ

という気持ちも起こってくるだろうし、子どもたちが語り合って、共通理解を図りながら、違う意見を聞きながらというようなことにつながっていくかなって感じがするんですが。

山本市長            どうでしょうか。

原田委員さん、どうでしょうか。

原田委員            そうですね。先ほど杉原さんがおっしゃったように、「安心して」の意味はすごく分かりますし、保護者としてもやっぱり安心・安全があってこそ、子どもたちの意欲が湧いてくるものだと思うので、私は理解できます。ただ、ここに書くとしたら、齋藤委員がおっしゃったように、「意欲的に」とか「いきいきと」のような言葉に置き換えてもいいのではないかと思います。

齋藤委員            私がここで安心にこだわっているのは、授業が安心じゃなくて学校全体が安心にならなくてはいけないということ。だから、安心して学べる授業づくりと、ここがダイレクトに結びつかない気がするので、ここであえてお話をしているということです。

山本市長            授業に固定した場合には、安心してじゃないかと。

齋藤委員            はい。学校全体が安心で安全だということは大前提にないといけないんです。そういう意味で、ここで引っかかりを感じます。

領家教育長          今ので腑に落ちました。安心というのが、人間関係だったり、学校全体、それから友達同士の関係や子どもたちと教職員の関係、そういったところを大事にしたいというのと、ここに安心して学べる授業づくりとあるのは少しかけ離れてるんですね、なるほどなるほど、理解できました。

別の視点ですけれども、昔よくタイがいっぱい泳ぐ学びにしたいよねって言っていたんです。タイがいっぱい泳ぐ。先ほど、山本委員の言葉にもあった、やってみたい、知りたい、深めたい、もっと話したい、もしかしたらやりたくない、そんなやりたくないも含めて、そんなタイを子どもたちが自分たちで語れるような、それが齋藤委員がおっしゃるような挑戦することも含めて何か必要かなとい

うようなことを思いました。

それから、この間政策説明会に皆さんにも出ていただきましたが、益田市の生徒指導推進プランの中に目標としてあるのが、関わり合う人間関係を主体的につくりながら自らの行動を決断し、実行できる、こういうあったか強い益田っ子を育てるんだということを生徒指導の目当てにしているんです。それはまさに挑戦だったり、できないことを自分で決める、決断するって難しいことだと思うんですが、だからこれもどこかの中に入れ込みながら、授業づくりとは違う中の部分をベースとしてやるっていうことが、齋藤委員がおっしゃる安心じゃないよ授業ってっていうのが、僕は腑に落ちた感じがしました。ありがとうございました。

山本委員

私も腑に落ちました。大前提として安心・安全っていうのはもっと深いベースのところにあって、その上でのこの事業なんだということで、そうするとやっぱり子どもたちが意欲的に学べる環境づくりっていう部分がテーマになると、生き生き学ぶですとか自ら学ぶだったりとか、そういった表現がいいのかなというふうに思いました。

山本市長

ぜひ事務局でご意見を踏まえて考えていただけたらと思います。

杉原参事

参考にさせていただきます。ありがとうございました。

山本市長

そのほか、皆様からいろいろと気づいたこととかございますでしょうか。

私から、雑多な話になるんですけど、対話って言ったときに私が思い出した一つのエピソードが、戦後間もない頃に教育基本法が変わって、従来の教育からがらりと代わったときに、学校の先生方がなかなかそこについていけなかったと。例えば、GHQの指令によって教科書のどの部分に墨を塗りなさいってことは教えられるわけですけども、民主主義についてこれから学んでいくんだっていうことを言ったときに、まず学校の先生方が民主主義を知らないから、これからは先生が言うこととか政府の言うことが正しいんじゃないかって、教室の中でみんなが議論して多数決で決まったことが、それ

が正しいんだろうと言ったそうなんです。そう言われた子どもの中の一人が、ちょっと先生を試してやろうと思って、じゃあ先生、これから多数決をしますね、1足す1は2だと思う人手を挙げてって、いと少数しか挙げない、じゃあ3だと思う人って言うとはいはいと手を挙げる、もちろんそれは生徒が仕込んだわけですけども、じゃあ先生、これから1足す1は3でいいですねって言われたときに先生が困ってしまったって話なんです。

これは、それを言った人が何が言いたいかっていうと、多数決原理で決めるべきことと多数決で決めてはいけないことってというのは、多数決以前にもう決まっている真理とは別なんだと。そのところを先生も深く理解していなかったので、安易に学校で多数決で決まったことが正しいんだ、これからはそれでいくよって言ってしまったっていうことがあったそうです。

ということは、対話によって進めるべきことは何かっていうこともあるし、もう一つ言うと対話によって進めるべきかどうかっていうことも、やっぱり対話によって、これはみんなで対話していこうよっていうふうに深めていくのか、これは対話じゃないよねと、ここに書かれてることはもう正しいんだから、これを前提にしてこれから対話を進めていこうとするかっていう、そこも対話で子どもたちが考えられるようになるってことが本当の理想だと思うんです。

ですから、対話っていうのはもっと奥が深いというか、対話の次元も幾つもあるのかなというふうに思います。

齋藤委員

ちょっと余談ですけど、今の市長の話で思い出したのは、アメリカのNASAがロケットを打ち上げて人類を最初に送ろうとした時のことです。それは、もし事故や事件が生じたとき、はたして船長の指示通りに乗組員全員が行動するかということだったのです。もし船長の判断が間違っていたら全員が帰れなくなるかもしれないし、誰もが未経験のため正しい判断ができるかどうか我问われたのです。そのため全員が帰れるためにはどうしたらいいかということの討論を、乗組

員全員のコンセンサスがとれるまで徹底的に行ったのです。全員が納得することができれば、万が一その結論が間違ったことになったとしても、乗組員は納得できるだろうと考えたわけです。

この徹底討論の方法が、その後「NASA学習」として取り入れられ、特に日本の企業研修などで積極的に使われました。これからの複雑な時代は、正解が何かが分からない状態が来そうです。そういう時代の中を生きていかななくてはいけない子どもたちには、自分たちで考えさせる、話し合いをさせる、人の意見を聞くという、それがとても大事だと思うのです。そして、子どもたちの声をしっかり聞くことが必要ではないでしょうか。

参考までにお話をさせていただきました。

山本市長

深い、貴重なお話でございました。

まだ時間は少しあるわけですが、皆さんの中で、まだここがちょっと腹落ちしないとか、もしくはもう少し言っておきたいとか、一言ありますか。

原田委員

「学びに向かう子」の育成の先には、将来の選択肢の幅を広げるといふ目的があるとことですが、現在取り組みを進めている益田版対話プラスについて、私も何度かカタリバのときに参加させていただいて子どもたちと対話をさせていただきましたが、すごくもったいないなと感じていました。人生グラフを使って、こういうことがあった、こう考えたという話を共有し合う時間はす大事です。でも一方で、あれだけの人数の大人が子どもたちのために時間を割いているということは、それだけたくさんの職業について知ることができる機会でもあると思います。ただ、自分の人生を伝え合うだけではなくて、大人から、こういう仕事をしていて、仕事をする上でこんな苦労があって、こんな喜びがあるということも一緒に伝えていただくことができれば、それこそ子どもたちの将来の選択肢を広げる、目に見えている職業だけではなくて、今まで知らなかった職業について知ったり、自分の能力を生かせる場は、見えていなかった仕事の裏側にもあったんだ

という気づきにつながったりするのではないかなと思います。型通りの対話の形を続けるのではなく、せつかくなので、対話の時間に加えて、それぞれの職業についても伝える、教わる、話し合えるきっかけになるよう、益田オリジナルの形に変えていっていただきたいなと思います。

長嶺部長 今日、ひとづくりの課長さんは呼んでいませんが、今言われたとおりで、決まったことをずっとやっていくだけではなく、名称も変わったことですから、対話のプラスという部分をどう捉えるか。今までずっと対話でカタリバ、カタリバってやっておりましたけど、そこにプラスが加わったところっていうのは、今まさにそういうところだと思います。担当課長にも伝えながら、このプラスっていうのをどう捉えていくかっていうのをこれからしっかり考えていこうかなと思いました。

原田委員 ありがとうございます。

山本市長 ありがとうございます。本当に貴重なご示唆だったと思います。

齋藤委員 それと、細かいところですが、2枚目のところ、この左側の各校の研究実践、それから授業改善の下に4つ点があります。その2つ目に学校図書館の利用ってありますよね。学校にある図書っていうのは非常に限りがあるわけです。子どもたちがこれからAIなどについて学ぼうとしたとき、学校図書館だけでは間に合わないのではないのでしょうか。公立図書館や文化施設などの外学校外施設などとのつながりを作ったらどうかというのが1点です。

それともう一つ、家庭学習の充実のための取り組みって、この家庭学習っていうのは宿題という捉え方でいいんですか。

杉原参事 宿題という決まったものというよりは、授業のモデル図にもありましたけれども、単元を通した学びというところなので、これは1時間1時間の授業で終わりじゃなくて、その授業で学んだことを家庭学習で生かして、またその家庭学習で培ったことをまた次の授業へという、家庭学習と学校での学習との往還のようなイメージで家庭学習の

充実というようになりました。

齋藤委員 例えば、子どもたちが1日4教科とか勉強してるわけですが、その全部を家に帰って学習しなさいということですか。

杉原参事 全ての教科、全部の時間というのはなかなか難しいかもしれないですけど。

齋藤委員 いや、現実難しいと思いますし、最近、宿題をやめる学校も出てきています。もっと子どもたちにゆとりを持って、家は安らぎの場所にしようとの考えからです。その点からして、家庭学習とは何か考えてみる必要もあるのではないのでしょうか。

杉原参事 ありがとうございます。

山本市長 貴重なご意見かと思えます。ありがとうございます。

そのほか、皆さん何かランダムにありますでしょうか。

山本委員 この3ページ目、気づきと対話のある授業推進の中で、成果や課題の共有化、具現化と書いてあります。この事業を進めていくためには、学校の先生方もこれから授業の在り方、子どもの向かい方について考えて一工夫する必要があると思います。

でも、現場の実態はというと、なかなか忙しい中でそういったことがプラスされていくということになります。本当に共有化と具現化ってとても大事だと思うんですが、共有化については先ほど言いましたけれど、具現化っていうのは、例えばマニュアルを作ったりとか、何かそういうイメージなんでしょうか。この共有化と具現化が一人一人の先生方の負担軽減につながるものであるといいなと思います。その上で、レベルアップできたらいいなと思いますので、そこの辺りがまだ私もイメージできていないんですけど、何かいい形で具現化できるといいなと思いました。

杉原参事 事務局としてのイメージとしては、対話の形も様々であったり、それから各校の研究実践に寄り添ってっていうところの授業改善というところもあるので、各校で研究を進めていっていただいて、その各校の取り組みの中で回していけるような形になるといいかなというのが

事務局としての考えではございます。こういうモデル図みたいなのは最終的に4年間かけてつくり上げてみようとは思ってはおりますけれども、先ほどあったように対話のある場面と対話が必要のない場面っていうのもあったりとか、内容というところもあったりするので、これで一つの型というよりは大きなモデルみたいなもので示せたらなと考えております。

それから、具現化につながる、どちらかというとも共有化の話になるかもしれないですけども、学力育成のプロジェクトチームを組織したいと思っております。意欲のある方々に年に何回か集まっていたいただいて、授業を公開していただくっていう一つの提案をさせていただいて、それを一つの形としてそれぞれの学校に持ち帰っていただけたらなというところを考えております。具現化とはちょっとまた話が違うかもしれませんが。

山本市長

私もこの成果や課題の共有化のところでは思ったのは、愚者は経験に学び賢者は歴史に学ぶという言葉がありますが、失敗事例をその失敗した人だけがこれはいけなかった、こうすればよかったって学ぶんじゃなくて、それこそまさに共有して、ほかの先生が自分が実際に失敗する前にその失敗事例を知っておけばそれを避けることができるわけですね。ですから、成功事例と失敗事例、もっと言うと改善、要改善事項なんかもどんどん共有できるようにすることが非常に大事かなと思いました。

齋藤委員

もう一つ、よろしいでしょうか。今の話の延長でいくと、これを要綱で決めて学校へ配って、この方向でいきたいと思いますということになるわけですね。

杉原参事

大きな枠組みとしては。

齋藤委員

そうすると、これは学校の中だけのことになってしまうので、学校外での活動や学習の機会も積極的に取り入れていく必要があると思うので、外部とのパイプを作っておいたらどうでしょう。

それからもう一つ、ちょっと細かいことですが、2枚目の右上に

事業の狙いっていうところがあります、黒枠で塗られてるところが。その3番目、端末活用の活用促進っていう、活用が2つ入ってるんです。これ、1つ要らないですね。

杉原参事                    ありがとうございます。

山本市長                    それも大事ですから。文章が固まってしまうと。

領家教育長                どうなのでしょう、ちょっと今の発言を聞いて思ってたんですけど、このモデル図がありますよね。これを学校の中にとどめるだけじゃなくって、齋藤委員さんおっしゃるのは、例えば保護者の皆さんにも学校はこんなことしてますよと、ついてはご家庭では何かどんな工夫ができるでしょうかってというようなことですか、あるいは放課後児童クラブの方々もいつも子どもたちと関わってくださってますので、そんな方たちにメッセージとして、学校で大切にしていることはこんなことですよ、皆さんのところはどうですかみたいなことも必要だっというご意見ですよ。

齋藤委員                    そうですね。つまり、子どもたちはここから社会に育っていくわけです。学校は一生懸命やりますよということは分かりますが、学校の中だけの問題として捉えるのではなく親御さんとの共通理解が必要になってきます。今、両者の関係が上手くいっていないのではないかと心配しています。果たして地域社会との連携はどうでしょうか。例えば、地域社会の一員として子どもたちを受け入れてもらうこと。

ですから学校の中だけの狭い範囲で捉えないでほしいものです。

領家教育長                益田市には、つろうて子育て協議会というのが……。

齋藤委員                    ありますよね。

領家教育長                それぞれの地域で地域性がある活動をやっているんで、そういったところでのメッセージを送るとか、いろいろ手のつけどころはあるように今感じました。

齋藤委員                    というのは、保護者の方と話し合いをすると、今学校が何やってるかよく分からないという声をよく耳にします。保護者会があっても、先生方も家庭の子どもたちの状況をあまり聞かないし、成績の話が中

心になっているようです。しかも、短時間で終わってしまう。

親御さんの方からは、学校に聞いたり言ったりすることは難しそうですから、むしろ学校のほうから情報提供しながら、一緒にやっていきましょうよということの投げかけをしながら、両方から「学び」について理解を図ってもらいたいなと思いますけど。

山本市長           そうですね。例えば研修なんかも1回から5回まで詳しく書いていますけど、ここまで共有する必要はないわけで、もしかしたらもう一枚要るかもしれないですね。

齋藤委員           そうですね。

領家教育長        そうですね。

山本市長           家庭、地域と共有できる資料、説明が。

                  そのほか、いかがでしょうか。その他も含めて、何か日頃の思いからも何かありますでしょうか。

領家教育長        今日こうして皆さんとしっかり対話をしながら、学びに向かう子の育成ということを大きな目安にして議論させてもらって、少しずつ見えてくることもたくさんあったんじゃないかなと思います。

                  そうすると、益田市の教育委員会では、平成27年にこの総合教育会議をベースにしたところで、教育に関する大綱というのを策定させていただいています。高津川のアユが遡上しながら泳いで、また回流しながらのようなことをベースにしながら、大事なポイントはこういうとこなんだよということをお示しして、平成29年に一度改定をしているんです。ですが、今日の議論を聞きながらすごく感じるものがあって、まさに今のこと、齋藤委員がおっしゃったこと、原田委員がおっしゃったこと、山本委員がおっしゃったこと、市長がおっしゃったことなども踏まえて、ちょうど2年後に教育ビジョンの改定ですとか社会教育の振興計画の改定も迫ってきていますので、その辺り、今日議論に参加していただいた皆さん方の思いを聞かせていただければ、また今後の参考になるかなと思うんですが、いかがでしょうか。

山本委員 大綱については、先ほど言われたようにビジョン等の改定に合わせて全体を変えられるのかなと思うのですが、見てみますとやっぱり29年度に改正はされていますけれども、それから幾年かたって当初構想にあった事業も少し形を変えて実施されていたり、計画の名前も変わっているというところも見受けられます。全体的な大幅な改正は、そのビジョンに合わせてでもいいと思うんですが、言葉や名称については少し整理をしてもいいんじゃないかなと思います。

山本市長 確かにそうですね。27年度につくって29年度の改定はマイナーチェンジでしたから、マイナーチェンジですぐできるものとかすぐやらないといけないものは、それはやったほうがいいと思います。

原田委員さん、いかがですか、大綱について。

原田委員 この「学びに向かう子の育成」と同じように、捉える人によって捉え方が異なるような表現があるのではないかと思います。そういうところはもう少し具体的に明確化した表現に変えていければよいのではないかと思います。

山本市長 分かりました。

齋藤委員さん、いかがですか。

齋藤委員 今まで大分お話ししてきましたけど、やっぱりこの学びっていう言葉の裏にある、何のために学ぶのか、学んだことをどう生かしていくかという視点を忘れないでいただきたい。

今、原田さんがおっしゃったように、どうしても行政的な立場の言葉が多いものですから、できるだけ優しく、具体的に表現した方がいいかなと思います。

山本市長 それと、大綱の位置づけというか意義というか、それも非常に難しく、ちょうど総合教育会議が始まるのと同じ時期に法が改正されてつくったわけですが、教育委員会だけではなくて、市長部局と協議調整して連携してということになっておりますので、その意味合いというものをもう一回見詰め直さないといけないのかなと思いました。

そうなる、本当に今のご意見を伺うと、まず用語等で変わって

いるものについては早急に改定をして、大きな考え方についても少し時間をかけてでも考える必要もあると思います。そういう方向でお願いします。

領家教育長 はい。ありがとうございます。

山本市長 そのほかよろしいでしょうか。

では、もうこの気づきと対話のある授業づくりについてはよろしいでしょうか。何か言い残したことはないですか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

それでは、その他に移りたいと思います。

皆様のほうから、今日の議題のほかに何かございますでしょうか。よろしいでしょうか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

山本市長 それでは、以上で議事を閉じたいと思います。

今日は本当に、積極的に示唆に富むご発言をいただきましてありがとうございました。では、進行を事務局にお返しします。

齋藤課長 本当に活発なご意見をいただきました。先ほどからキーワードに出ました対話、皆さん方の対話を聞きながら、私自身もいろいろな気づきをいただいたなと思っています。

最後に出ました教育の大綱ということでございます。お話が出ましたけども、27年、それから29年の一部リニューアルということで、確におっしゃられるとおりにかなり古い計画の内容だったというところがあります。教育ビジョンの改定のタイミングも見ながら、大きい改正をする前にまずは、先ほど市長がおっしゃいましたが、文言等の見直しに取りかかるよう検討していきたいと思っています。

以上をもちまして令和6年度の総合教育会議を閉じさせていただきます。本日は大変ありがとうございました。

＝ 終了時間 11時40分 ＝